

平成 22 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名

「抜毛癖の子どもに対する養護教諭の関与に関する検討」

学位の種類： 修士（ 看護学 ）

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 看護科学域

学修番号 09894604

氏名： 亀野由紀子

(指導教員名： 山村礎 教授)

【目的】本研究は、学校精神保健における抜毛癖の二次予防の観点から、抜毛癖の子どもに対する養護教諭の関与の実態を明らかにし、支援のあり方を検討することを目的とした。抜毛癖の子どもの情緒行動特性を教師用子どもの行動チェックリスト(Teacher's Report Form: TRF)を用いて評価し、関与の契機や関与内容が、抜毛癖の改善に影響しているのかを検討した。

【方法】東京都の小中高等学校 2628 校から 500 校を乱数表にて無作為抽出し、そこに勤務する養護教諭 1 名に対し、郵送法にて自記式質問紙調査を行った。質問紙は学校、養護教諭、抜毛癖の子どもの基本属性に加え、関与の契機、関与内容、関与後の抜毛状況の変化について尋ねた 24 項目及び TRF で構成した。得られたデータは、関与の契機、関与内容、関与後の抜毛状況の変化の 3 点について、子どもの属性及び TRF を、名義尺度は χ^2 -test 及び Fisher's exact test、順序尺度及び間隔尺度は t-test 及び Mann-Whitney U test を用いて比較検討を行った。さらに、抜毛癖の改善に影響する要因を Logistic Regression Analysis を用いて探索した。

【結果】140 名の養護教諭から回答を得て、64 名の養護教諭に 68 名の抜毛癖の子どもへの関与経験があった。抜毛癖の子どもの属性は、男子 21 名、女子 46 名、平均年齢 11.7 歳であった。抜毛癖の子どもの約 8 割が、TRF の総得点で境界域あるいは臨床域に該当し、深刻な問題行動を呈していた。また、約 9 割は自発的に相談行動をとっておらず、養護教諭を始めとする他者の気づききっかけで関与を開始していた。関与内容では、8 割以上が担任との情報共有や話し合いを行っており、随伴症状や問題行動などの目に見えて気になる症状がある場合は、本人への直接的支援を行う割合が高かった。養護教諭の関与を通じて、7 割以上の抜毛癖の子どもに改善傾向が認められた。抜毛癖改善の予測因子を探索した結果、「担任への関与順位」と「保護者への関与順位」が影響していた。

【考察】抜毛癖の子どもの早期発見には、養護教諭だけではなく全ての教職員の抜毛癖に対する問題意識の向上と気づきの視点を養うことが必要である。養護教諭が抜毛癖の子どもに積極的に関与することには意義があることが示唆されたが、抜毛癖の子どもは深刻な問題行動を呈していることが多く、メンタルヘルスを中心とした専門的支援が必要となる可能性が高い。抜毛癖の改善には、担任を介した保護者との連携を積極的且つ迅速に行う必要があると考えられる。